Operation Raleigh News

Operation Raleigh DENSO

No.14

昭和60年(1985)11月5日(火)
毎月1回発行

●発行所　オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1−7−10 築地オーミビル502号
電話　東京(03)544−7413

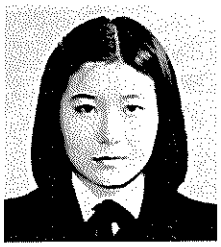
●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装㈱のご協力で制作されたものです。

1984年次最終組(チリ・フェイス)5人出発前アンケートに回答

あこがれの南米チリへ準備OK

——OR応募の動機は?

片岡　外国人とひとつの目的に向かって活動することはマクロな意味で国際交流につながると思ったから。ただで南米へ行けることも…。


片岡さん

加藤　帆船で海を渡ったり、自分の専門とも通ずるサンゴ礁調査などを外国で経験できそうだったからです。

鈴木　視野を広げること。非日常性の中で自分や日本のことを考えたい。

高柳　後先のことを考えずに、ヤセがまんでもありきたりでないことをしたくて…。

吉田　文明に守られた安易な生活に満足していてよいのかという疑問と極限状態における自分の行動に対する興味から。

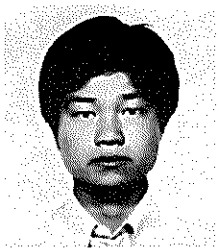
吉田君

——出発に当っての不安は?

片岡　ORが先進国の自己満足に終らないかどうかという点です。

加藤　自分の語学力や3ヵ月間体力的についていけるかが不安です。

鈴木　不安に立ち向かう姿勢自体もORの目的のひとつだと思います。不安が多い方が奮い立つぐらいで、不安に対する不安はありません。


鈴木君

高柳　チリは軍政で、いま政情が安定していないらしい点です。

吉田　他のベンチャラー達とうまくやっていけるだろうかという不安があります。

——ORに対する周囲の反応は?

片岡　父はやたらスペイン語の本をくれます。母はチリの地図を家に置かなくちゃといっています。

高柳　おじいさんは危ないからやめろといっています。

吉田　家族は思ったより喜んでいます。友人はうらやましがる者と何をしに行くんだという者に分かれています。

——参加に当っての抱負は?

鈴木　新しい刺激をどんどん吸収したい。他国のベンチャラーとも世界の諸問題や文化について話したい。

高柳　ちょっと本気を出しますか。

吉田　書物の知識を超えるものを得たい。価値観が多少なりとも変われば幸いだと思っています。

——これまでどんな準備を?

片岡　スペイン語の勉強。北大山岳部OBにコンタクトをとりました。

加藤　英会話およびスペイン語の勉強。南米に関する本も読み、外国で潜れるためのライセンスも取得しました。

加藤さん

鈴木　英語、スペイン語の勉強をしようと努力はしました。自信をもてるのは体力です。

高柳　体力面では気をつかってきたつもりです。プールで泳ぐとか、自転車を利用するとか……。スペイン語はラジオの講座をやろうとしたが続きませんでした。

高柳君

吉田　色々な分野のことに興味をもち、新聞の一・二面や文化欄をよく読むようにしました。

——現地で何を主眼にしますか?

片岡　地球は宇宙の一部だという実感を得たいと思います。

加藤　フィヨルドでの生物調査に参加したいと思います。

鈴木　とにかく色々なことを体験したいと思います。

吉田　民族舞踊を学びたい。パタゴニアの自然の神聖さを感じてくるつもりです。

85年次のオリエンテーション各誌で紹介される

1985年次参加青年30名を対象とした強化合宿訓練は10月18日㈮〜20日㈰の3日間神奈川県丹沢で実施されましたが、新聞・雑誌記者も同行取材。サンケイスポーツ、Be-Pal、山と渓谷などに取りあげられました。

(詳細は2・3面)

'85年次参加青年オリエンテーション

丹沢強化合宿レポート

歩くこと・眠ることの訓練に焦点

レポーター/ORJC実行委員　伊藤　幸司（技術担当）

去る10月18日から20日にかけて、30人のベンチャラー（第２期）の強化合宿がおこなわれた。

かれらが参加するのはオセアニアで展開される６つのフェイズである。

フェイズというのは、全体で４年におよぶオペレーションを構成する基本ユニットで、行動は「冒険」と「科学探査」と「奉仕活動」の３つから成り、期間は３ヵ月におよぶ。

個々のフィールドは海洋、海岸、ジャングル、山岳、砂漠、川とさまざまであるが、そのどれに参加しても、フェイズそのものが全体としてすぐれたトレーニング・カリキュラムになっている。

日本でおこなう強化合宿で何をすべきかはむずかしいところだが、今回は丹沢山塊の勘七ノ沢周辺を選び、「歩くこと」と「眠ること」の体験にポイントを絞ってプログラムを組んだ。

正味48時間の丹沢強化合宿を、技術的な側面から振り返ってみたい。

❶眠れぬ夜をたっぷり味わう

第１日目

夕刻、丹沢の登山口・大倉でバスを降りて合宿行動ははじまった。

各人３食分の行動食を受け取って、四十八瀬川に沿う林道をゆく。時速4.5kmほどの標準的なスピードである。

約２時間で源流部うしろ沢の小さな河原に着いた。山中はすでに夜の闇につつまれ、周囲のようすはほとんどつかめない。小石まじりの砂地のそこここに、５つのパーティがそれぞれ野営地を定めた。

気温が10度を割る山中で、テントはもちろん、寝袋もマットも使わずに夜を明かす。フォーストビバーク（不時野営）の訓練とはいえ、初心者にはきつすぎるとの意見があった。しかし条件は、熱帯の内陸地帯の夜とほぼ同じと見ていい。

流木をひろい、落ち枝を集めて火を起こす。雨上がりの山の木はすべて湿っていて、火はなかなか燃え上がらない。

小一時間でようやく湯が沸き、順にカップラーメンとパックの御飯を食べる。いわゆるラーメンライスである。それにイワシの丸干し、焼きジャガイモといったユニークな和風レーションである。食べるまでの期待とのバランスでいえば、あまりにもあっけない夕食である。

寒気は一段と厳しくなる。川原の小石を取ったり埋めたりして床をつくり、ポンチョをかぶって横になる。眠ろうとすると、服のあちこちからすき間風が吹き込んでくる。体温は地面に吸いとられて、足元がしびれるように冷たくなる。

２時間眠れたというのが最高であったろうか。ほとんど眠れない。午前３時を過ぎると、ほぼ全員がたき火を囲んですわっていた。空腹かえて、ひたすら朝を待つ。

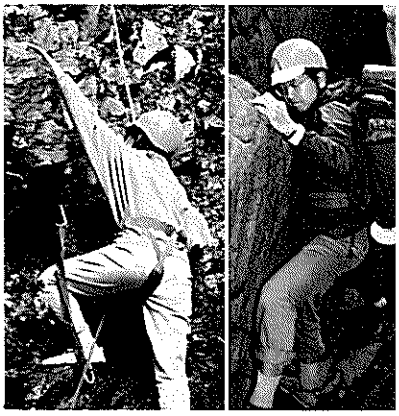
❷フリクションとバランスを学ぶ

第２日目

午前７時半に勘七ノ沢との出に集結して、ベンチャラーたちルメットとゼルブストバンド（ん用安全ベルト）をつけた。

背負ったザックは重い人で15越える。足ごしらえは軽登山靴ニーカーにまじってタウンシュもある。ザック内の着替えだけいつ水に落ちてもいい防水パッしてある。

脚力、ボッカ力をつけるなら道を選ぶところだが、オフルー



どんな歩きにも対応できる基礎として、岩場の歩きと、初歩的登りを主体にした。最後には沢の急登もある。

勘七ノ沢は丹沢で最も有名な沢落差５ｍのＦ１から、12ｍのＦで５つの滝を越していく。

重いザックを背負って沢を渡る

時間のロスは覚悟の上で、Ｆ１もＦ５も全員が登はんした。両手両足４点のうちの「３点確保」の原則と、体を岩面から離して直立する登はん姿勢は、体験しておかないと実用にならないからである。

途中にはフリークライムの岩場もあったが、ベンチャラーたちは危な

げなくよじ登っていった。濡れた岩をしっかりとつかむ足裏のフリクション（滑り止め）も確実に身につけたようである。また、ルートはあっても道のない沢では、各人それぞれのルートファインディングも必要であった。

午後には廊下（峡谷ふうの岩場）やいくつかの小滝を通り、浮き石の多いガレ場を急登して大倉尾根に出た。

夜は神奈川県立登山訓練所に下って、深夜11時までキャンプファイヤーを囲んだ。２次会はさらに午前２時過ぎまでつづいた。体調を崩した者はひとりもいなかった。

❸何にでも対応できる視野をもつために

30人のベンチャラーは６人ずつ５パーティに分けられた。

教育係ともいうべきリーダーは、チーフの恵谷（えや）治さん（早大探検部ＯＢ、フリージャーナリスト）以下６人で、すべて探検や登山の海外遠征経験者。30代後半で、表現活動にたずさわっている人物ばかりである。だから視野が広い。そしてサブリーダーとして、大西洋横断航海や中・南米でのフェイズを体験した第１期のベンチャラー６人が加わった。

この強化合宿は、単に技術を修得するというだけではなかった。英国の探検的伝統をバックボーンとするＯＲ（ローリー卿記念大作戦）に参加するに当たって、正統的な探検精神を感じとってもらおうとした。

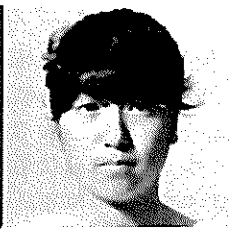
お互いが理解しあい、じっくりと話し合うためには、眠れぬ一夜もまた有効であったはずなのだ。

第３日は午前中に救急法の講座があり、午後は装備という側面からのオリエンテーションがおこなわれた。

装備については第１期ベンチャラーへのアンケートをテキストにして現地行動のようすを聞き、基本的な考え方についてはリーダーたちがコメントした。

この合宿を共通体験として30人が結びつき、第１期のベンチャラーとのコミュニケーションも深めていってもらえたら、ＯＲ参加の意義もまた、一歩深まるのではないかと思う。

OR参加青年
リレー・レポート
《第６回》



パナマでの生活をふり返って

1984年次第６陣　平野裕加里

私にとって初めての外国、パナマでの生活の反省点は、第一に英語である。「もっと英語がわかったら…。」何度こう思ったことか。英語を聞きとることの難しさは、毎日のミーティングで、すぐに痛感させられた。しかしミーティングなら終わってから質問すれば、リーダーや他のベンチャラーが親切に説明してくれる。もっと困ったのは数人で語り合う時だった。一対一ならゆっくり話してくれる彼らも、６人、７人となると、そのスピードに私はついていけなかった。対等に話ができるまでには少し時間がかかった。単語の羅列と身ぶり手ぶりで話すことはできても、話している内容がはっきりわからなければ口をはさめない。英語がわからないというのはつらいことだった。それでもグループに分かれて本当に日本人が一人になるころには、自然に英語に溶けこめるようになっていった。それからは毎日が楽しくてしかたなかった。英語がわかるというのは、本当にすばらしいことだった。やはり事前に英語に慣れておくことと、現地でも日本人どうしかたまらず、前向きな姿勢で英語にぶつかることが大切だと思う。

言葉の面ではもう一つ、スペイン語をもっと知っておくべきだったと思う。パナマのフェイズは、全体的に現地の人と接する機会は少なかったのであまりさしつかえはなかったのだが、私のグループは病院の仕事をしたので、スペイン語は必要だった。現地ベンチャラーに教わったり、辞書に頼ったりしながら少しずつ覚えたのだが足りなかった。目の手術で心細くなっている人達をもっと勇

気づけてあげたり、町の学校の屋根作りを手伝ってくれた現地の人とより多く語り合ったり…。スペイン語が話せたら、やりたいことはもっとあった。やはり現地の言葉を覚えていくことは、その国の生の姿を知る上でも必要なことだと思う。

それから現地で驚いたのは他の国のベンチャラーの体力である。いっしょにジャングルに入った中で女の子が私一人だったせいもあるが、ジャングルでの体験はとてもきつかった。転んでは起き、最後までみんなといっしょに進めたからよかったものの、歩き方などについて、もっと知り、少しでも経験しておけばもう少し楽に進めたのではないかと思う。

最後に私が反省すべき点は、日本についてよく知らなかったことである。皆、お互いの国に興味をもち、話しをする中で、私は友人からの日本に関する質問にすべて的確に答えられたわけではない。自分の国についてうまく話せないのは、実にはがゆいことであった。

言葉の問題をはじめ、反省点は少なくないが、ジャングルで共に励まし合った仲間や、語り合った人達とは真の友達になれたし、すべてが私にとって新鮮かつ刺激的で、本当にすばらしい体験であった。

日本代表派遣青年のページ

ペルー・フェイズの細田さん 帰国後アンケートに回答

ペルー・フェイズに参加した細田香納美さんが帰国後アンケートに回答してくれました。

Q１　当初のもくろみは?
各国の青年たちと同じ目的に向かって努力し、国際交流を深めること。

Q２　帰国後のORへの評価は?
期待通り、すてきな経験でした。

Q３　苦労したことは?
毎日の単調な仕事です。

Q４　楽しかったことは?
ベンチャラーや現地の人々との毎日の生活。

Q５　異国人とのふれあいは?
言葉の問題より、思いやりや努力が一番大切だと思いました。

Q６　有意義だったプロジェクトは?
医療奉仕。奥地の人々への予防接種プロジェクトです。

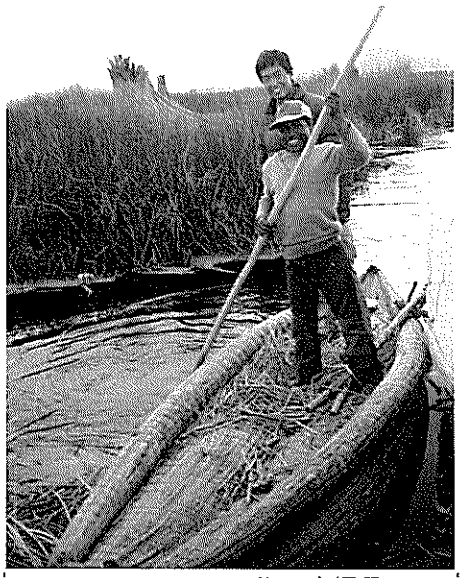
Q７　事前にマスターしておけばよかったことは?
スペイン語をもっと話せるようにしておくべきでした。

Q８　日本電装に関する反応は?
評価は高い。みんなが知っているし、ハッピやTシャツは好評でした。

大塚君・石本君英国に滞在

ペルー・フェイズで活動した大塚洋君と石本一鶴君はペルーからロンドンに直行し、10月末日現在も英国に滞在中です。両君の手紙（抜粋）をご紹介しましょう。

〔大塚君〕私と石本君は10月10日にロンドンに着き、翌日はペルーでの活動を報告しました。２人とも元気で、英国国内を旅行しようと思っています。



ペルー・チチカカ湖で大塚君

〔石本君〕10月末までの３週間ＯＲで得た友人たちに招待されて、英国国内を周遊しようと思います。ウエールズでの岩登りやクルージング、リッチモンドでの乗馬、スコットランドでの湖めぐりなど楽しみです。しかしペルーの物価にくらべて、イギリスの物価高にはまいっています。僕は11月３日午後３時着の日航機で成田に着く予定ですが、大塚君は未定のようです。

事務局ニュース

東京で85年次結団式

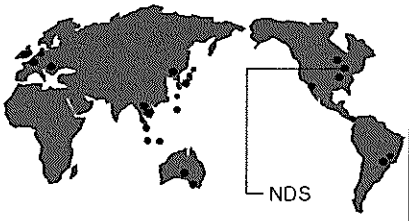
1985年次派遣青年結団式は10月18日㈮午前11時から東京・銀座東急ホテルで行なわれました。永井委員長、稲生委員（日本電装専務）、牧野事務局長、実行委員会メンバー、オリエンテーションリーダー、1985年次派遣青年30名、1984年次派遣メンバーらが出席し、記者発表、結団式、立食パーティーなどのプログラムで実施されました。このあと、1985年次派遣青年30名はオリエンテーションに参加するため神奈川県丹沢に出発しました。

新聞広告で30名紹介

1985年次日本代表派遣青年30名の決定を知らせる日本電装の広告が10月末に日本経済新聞、朝日新聞、サンケイ新聞、毎日新聞に掲載されました。「力の、限り、力に、なりたい。」というコピーで、写真は神奈川県丹沢・強化合宿での岩登り訓練中のもの。30名の派遣青年の顔写真も紹介されました。

デンソーワールドワイド・オペレーションNo.3 ―― デトロイト

自動車工業の中心地にあるデンソーのKey Station。



ニッポンデンソー セールス(以下NDS)は、1975年にアメリカの各自動車メーカーに日本電装の製品を納入することを目的に設立されました。現在は業界の動向などをキャッチするとともに、ニーズに合わせ各種電装品・燃料噴射装置、メーター類などの販売を行なっています。NDSはよりよい製品を、より早く提供するための北米のKey Stationなのです。

所在地:21840 West Nine Mile Road, Southfield, MI 48075, U.S.A Tel(313)352-4440,4441
売上高:122,000千ドル(280億円)/従業員数:99人
〈1985年4月現在〉

DENSO
日本電装株式会社 〒448 刈谷市昭和町1-1 ☎(0566)22-3311代